

男子大学生の子育て意識を規定する要因

溝端 奈穂・武藤 麻美・桂田恵美子

I. 問題

母親や父親は子どもの発達に影響を与える存在として取り上げられることが多いが、母親や父親もまた、子どもとの関わりや子育てを通して精神面・行動面とともに人間的に発達し変化していくことが発達心理学分野の研究で明らかにされている。柏木・若松（1994）は、母親・父親が親になり子どもと関わることで、「柔軟さ」「自己抑制」「視野の広がり」「運命・信仰・伝統の受容」「生き甲斐・存在感」「自己の強さ」といった様々な側面が変化しているということを明らかにした。森下（2006）も、父親になることによって「家族への愛情」「責任感や冷静さ」「子どもを通しての視野の広がり」「過去と未来への展望」という4つの側面が発達すると述べている。さらに数田（1998）も、親としての成長を自覚している父親が多く、子どもから強く影響を受けて父親としての意識が変化していることを示している。

このように、子育てを通して親自身も成長していくという肯定的な面が明らかになっているにもかかわらず、我が国では他の先進諸国に比べて父親の育児休業取得率が低いというのが現状である。厚生労働省発表の統計調査結果によると、平成19年度時点における育児休業取得率は女性で89.7%、男性で1.56%となっており、男女ともに前年度より上昇しているものの男性は依然として低水準のままである。さらに男性の育児時間についても、アメリカやスウェーデン、ドイツの一日平均3時間に比して、我が国では1時間にも満たないという状況であり、他の先進諸国と比較しても最低の水準となっている。では、父親が子育てを通して成長し発達するという父親自身の意識が、実際の育児行動に直結していない原因は一体どこにあるのだろうか。

富永・宮崎（2007）は、妻や子どもを持つ父親が、厳しい昇進制度や不況の社会状況との狭間において限られた時間の中で自分に課せられた役割を果たそうとし、葛藤状況に陥っていると指摘している。時事通信社による世論調査（2009）では、特に20代から30代の若年層で子育てに意欲的な父親が増えているという事実が明らかになったが、仕事におわれて育児をする時間がとれないとする人も多く、「時間の許す限りで」という条件付きで育児参加をしている父親の増加がうかがえる。都道府

県別データからも父親の労働時間の長さが育児参加を減少させていることが明らかになっている（水落、2006）。

そして、水落（2006）は父親の労働時間は外的要因であることから、何らかの社会政策によって労働時間を減らし父親の育児参加を促すことが可能であると述べている。子育て意識が高く積極的に子育てをしたいと思っている父親でも、自己の置かれた社会状況や労働条件によっては思うように育児参加が出来ないという場合もあり、このような社会的な問題が育児休業取得率の上昇や育児時間の増加を妨げる要因となっているといえる。

一方で、父親の育児参加に影響を与える父親個人の内的要因も指摘されている。例えば蛭田（2000）は、父性意識の発達に関する研究の中で、アンドロジニー・スケールの男性性得点も女性性得点も共に高い父親は家事の参加度が高く、子どもとの関わりも積極的であることを明らかにした。また、男性性得点も女性性得点も共に低い父親は仕事や家族関係、子どもとの関わりにも消極的であることを示し、父親の性格特性としての男性性・女性性のバランスが子育て観や育児参加度に影響していると述べている。また、三好（2007）は、幼児期や児童期において、父親に関わってもらったという印象や、父親からの“愛された実感”的な多さが、現在の、父親となった自分と子どもとの関係に影響を与えていると述べている。更に中嶋ら（2001）は、乳幼児と接した経験がある高校生・大学生は子どもを好きになる反面、逆に子どもや子育てへの拒否的な感情も生じていることを明らかにした。そして拒否的な感情を生じさせないように注意すれば、子どもとの接触経験が親になることへの意識や子育て意欲を高めるために有効であると述べている。

このように、父親の育児参加を阻む要因は外的・内的なもの両方であるが、本研究においては、内的要因に注目した。少子化や女性の社会進出が進む現在の社会において、仕事と育児の両立に対する女性の負担を軽減させるためには子育てに積極的な男性を増やす必要がある。そして、その為に心理学が貢献できることは、どのような対策が男性の意識改革として効果的であるかを検討し、提言することであると考えるからである。そこで本研究では、未だ社会的・外的な制約を受けていない男子大学生を対象に、個人の持つ性役割観や幼少期における自身の親との関わりといった内的要因と育児参加の積極

性との関連を検討することを目的とした。

これまでの研究から、本研究では、1) 平等的な性役割観を持つ男子大学生は、子育てに対して肯定的・積極的である、2) 幼少期において父親との関わりが多い男子大学生は、子育てに対して肯定的・積極的である、3) 乳幼児との接觸経験の多い男子大学生は子育てに対して肯定的・積極的である、の3つの仮説をたて、検討した。

II. 方 法

1. 対象者

私立大学の男子学生 116 名、平均年齢は 20.17 歳であった。また、男子学生 116 名の所属学部は、文学部 70 名、法學部 16 名、経済学部 17 名、商學部 8 名、人間福祉学部 2 名、理工学部 3 名であった。尚、留学生も數名いたが、日本人男性を対象とするため、分析から除いた。

2. 調査期間

2009 年 10 月～11 月に実施した。

3. 調査内容

(1) 性役割観

鈴木（1994）によって開発された平等主義的性役割態度スケールの短縮版 15 項目を使用した。使用した 15 項目すべて、「1. 全然そう思わない」～「5. 全くそのとおりだと思う」の 5 件法で回答を求め、得点が高いほど性役割に対して平等主義的となるようにした。なお、本研究における全 15 項目の信頼性係数（ α 係数）は .85 であった。

(2) 幼少期における父親とのかかわり

松平・三浦（2006）によって、父親の心理的存在を測る尺度として作成された「父親存在感尺度」33 項目のうち、本研究では、小学校時代までを思い出して回答してもらうため、小学校時代の父子関係には適切ではないと思われる 3 項目を省いて計 30 項目を使用した。なお本研究では幼児期・児童期における父親との関わりを問うため、全項目の語尾を過去形にした。使用した 30 項目は、「父親肯定感」・「生活習慣しつけ」・「子どもコミュニケーション」・「保護・承認」・「家族コミュニケーション」・「子どもへの関心」・「権力」の 7 因子からなる。この 30 項目すべてについて、「1. そう思わない」～「4. そう思う」の 4 件法で回答してもらい、得点が高いほど小学校時代までに父親と関わりがなされていたことを示すようにした。なお、本研究における、全 30 項目の信頼性係数（ α 係数）は .86 であった。因子ごとの信頼性係数（ α 係数）は、「父親肯定感」が .72、「生活習慣しつけ」が .69、「子どもコミュニケーション」が .59、

「保護・承認」が .76、「家族コミュニケーション」が .73、「子どもへの関心」が .39、「権力」が .72 であった。 α 係数の低い因子もあるが、全体の信頼性係数は高いので、そのまま使用した。

(3) 乳幼児との接觸経験

これまで、どれくらい実際に幼い子どもに関わった経験があるかを測定するため、細井ら（2005）によって作成された「子育て体験尺度」4 項目を使用した。これは、「赤ちゃんを抱いたこと」・「赤ちゃんにミルクを飲ませたこと」・「近所の小さな子どもの遊び相手をしたこと」・「小さな子どもに絵本を読んであげたこと」という 4 項目からなり、これらの項目すべてについて、「1. 全く無かった」～「4. 頻繁にあった」の 4 件法で回答を求めた。なお、本研究では、子育て体験の有無について、より具体的な状況を把握するために、子育て体験有無の調査対象期間を高校時代から現在までに限定した。本研究における全 4 項目の信頼性係数（ α 係数）は .79 であった。また合わせて、現在比較的頻繁に接している小学校入学前の子どもが身近にいるかどうかを尋ねた。

(4) 子育てへの意識（充実感・負担感）

子育てについての意識を測るために、福丸・無藤・飯長（1999）による尺度を参考に、細井ら（2005）が作成した「子育ての充実感・負担感尺度」8 項目を使用した。使用した 8 項目は、「子どもを育てることは自分の人生に充実感をもたらす」・「子どもを見ていると元気づけられる」といった「子育ての充実感」4 項目と、「子どもを育てるとはつらい仕事だと思う」・「子どもを育てていると自分の好きなことができないと思う」といった「子育ての負担感」4 項目からなり、この 8 項目すべてについて、自分が子育てすることになった場合のことを想像してもらい、「1. 全くそう思わない」～「5. とてもそう思う」の 5 件法で回答してもらった。そして、得点が高いほど充実感・負担感が高くなるようにした。なお、本研究における信頼性係数（ α 係数）は、「子育ての充実感」4 項目が .82、「子育ての負担感」4 項目が .51 であった。「子育ての負担感」の α 係数は比較的低かったが、本研究の目的変数の一つであるため、そのまま使用した。

III. 結 果

1. 子育て意識と各変数の関連

子育ての充実感・負担感と平等主義的性役割態度、親存在感尺度の 7 因子、子育て体験との関連をみるために、Pearson の相関係数を求めた。また合わせて、年齢との相関係数も求めた。Table 1 が示すように、子育て充実感と有意な関連が見られたのは、父親とのかかわりにおける「生活習慣しつけ」($r = .20$) と「絵本を読んであげた経験」($r = -.25$) であった。そして、子育て

Table 1 平等主義的性役割態度・親存在感・子育て体験の有無と、子育てへの意識との相関

	充実感	負担感
年齢	.15	-.28**
性役割態度得点	.16	-.23*
父親肯定感	.17	-.15
生活習慣しつけ	.20*	.00
子どもコミュニケーション	.01	-.10
保護・承認	.14	-.10
家族コミュニケーション	.02	-.06
子どもへの関心	.10	-.18
権力	.15	.15
子育て体験	-.17	.24**
赤ちゃんを抱いた	.01	.18
ミルクを飲ませた	-.17	.21*
遊び相手をした	-.13	.18
絵本を読んだ	-.25**	.22*

p*<.05 p**<.01

Table 2 子育てへの意識についての重回帰分析の結果

	充実感 (β)	負担感 (β)
年齢	.09	-.20*
性役割態度得点	.17	-.19*
父親存在感	.23*	-.15
子育て体験	-.15	.21*
F	3.42*	5.55**
R ²	.11	.17

p*<.05 p**<.01

負担感と有意な関連が見られたのは、「年齢」($r = -.28$), 「平等主義的性役割態度」($r = -.23$), 「子育て体験（合計得点）」($r = .24$), 「赤ちゃんにミルクを飲ませた経験」($r = .21$), 「絵本を読んであげた経験」($r = .22$)であった。また、身近に頻繁に接している幼い子どもがいるかどうかによる子育て充実感・負担感の差異は見られなかった。

2. 子育ての意識に影響を与える要因の検討

子育ての充実感・負担感に影響を与える要因を探るために、平等主義的性役割態度・父親存在感・子育て体験を独立変数として、子育ての充実感・負担感をそれぞれ従属変数とした重回帰分析をおこなった。なお、子育て負担感と年齢の間に有意な相関が見られたので、年齢を統制変数として加えた。その結果、モデルはどちらも有意であった（子育て充実感： $F = 3.42$, $R^2 = .11$, $p < .05$; 子育て負担感： $F = 5.55$, $R^2 = .17$, $p < .05$ ）。Table 2 に示されているように、平等主義的性役割態度得点が高いほど子育て負担感は低くなるという結果であった。このことから、仮説 1 は弱いながらも支持されたと言える。また、幼少期の父親存在感得点が高いと子育て充実感が高くなることが示され、仮説 2 も支持されたと言える。しかし、実際の子育て体験に関しては、子育て体験が多いほど子育て負担感が高くなるという結果であり、仮説 3 は支持されなかった。

Table 3 子育て充実感の重回帰分析の結果

	充実感 (β)
年齢	.08
性役割態度得点	.22*
子育て体験	-.14
父親肯定感	.22*
生活習慣しつけ	.21*
子どもコミュニケーション	.03
保護・承認	.14
家族コミュニケーション	.05
子どもへの関心	.10
権力	.21
F	2.17*
R ²	.17

p*<.05 p**<.01

Table 4 子育て負担感の重回帰分析の結果

	負担感 (β)
年齢	-.21*
性役割態度得点	-.19*
親存在感	-.15
赤ちゃんを抱いた	.07
ミルクを飲ませた	.04
遊び相手をした	-.01
絵本を読んだ	.14
F	3.19**
R ²	.17

p*<.05 p**<.01

次に、父親存在感が子育て充実感を有意に予測し、子育て体験が子育て負担感を有意に予測するという結果を受けて、幼少期に父親とのようなかかわりをもつたことが、また、どのような子育て体験が子育て意識につながっているのかを見るために、父親とのかかわりの総合得点の代わりに 7 因子、子育て体験の総合得点の代わりに 4 項目を独立変数にして同様の重回帰分析を行った。その結果、「父親肯定感」と「生活習慣しつけ」が子育て充実感を有意に予測することが示された（Table 3 参照）。しかし、子育て体験の方は、どの項目も有意な予測変数として示されなかった（Table 4 参照）。

IV. 考 察

本研究では、まだ社会的な制約を受けていない男子大学生を対象に、子育て意識、特に子育てに対する充実感や負担感に影響する内的要因に注目し、性役割観、過去における父親との関わり、子育て体験の有無を取り上げ、関連を検討した。その結果、性役割観や父親とのかかわりに関しては仮説が支持され、予測した通りの結果であったが、子育て体験に関しては予測に反した結果であった。これらの結果について考察していきたい。

蛭田（2000）の研究では、個人の男性性・女性性といふ性役割性格特性が男性の育児参加に関連し、男性性・女性性どちらも高いアンドロジニーの父親が子どもの

かかわりに積極的であることを示していた。本研究では、性役割特性だけでなく、個人の性役割観も子育て意識に関連しており、平等的性役割観が強い男性の方が育児に対しての負担感が少ないという結果であった。平等的な性役割観を持っているということは、子育てを母親だけの役割として捉えず、父親も子育てに参加すべきであるという考え方を持っているということであり、そのため、子育てを負担に感じることも少ないのであろう。しかし、本研究では、子育ての充実感とは有意な関連が見いだされなかったことから、平等的性役割観を持っていても、必ずしも積極的な子育て参加にはつながらないかもしれない。一方、幼少期の父親存在感は子育て充実感と有意な関連が見られ、幼い時に父親にかかわってもらったという思いが強い者ほど子育て充実感が高かったという本研究の結果は三好（2007）の研究結果と一致する。特に、因子ごとの分析によって詳細に見ると、「父親肯定感」「生活習慣しつけ」の2因子が子育ての充実感を予測したことから、「父親のような生き方が理想だった」「父親のような男性になりたい」といった父親を自己のモデルとして肯定する気持ちや、「規則正しい生活をするように言った」「門限をやぶるときびしく叱った」といった、しつけとしてきちんと教育されたという経験が、子育て意識を高めるうえで重要になると考えられる。また、「生活習慣しつけ」において関連がみられたが、「権力」においては関連がみられなかったことから、親の制圧的な力としての厳しさではなく、しつけとしての厳しさがより重要になるといえる。

子育て体験に関しては、中嶋ら（2001）の研究では、乳幼児と接した経験がある高校生・大学生の方が子どもを好きになるとされていたことから、本研究では乳幼児との接触経験は子育て意識に肯定的に働くと考えたが、結果は反対であった。つまり、実際に幼い子どもとのかかわりがある者ほど子育ての負担感が高いという結果であった。項目ごとの詳細な分析からは、特定の経験がよりネガティブに働くということではないことが示された。中嶋ら（2001）も、子どもが好きになる反面、子育てへの拒否的な感情も生じていることを示しており、本研究では、その否定的な部分のみが示された結果となつた。これは恐らく、本研究の対象者である男子大学生の子育て体験が全体的にネガティブなものであったためであると考えられる。実際の子育て体験は、慣れない者にとっては苦痛に感じることも多く、限られた経験しかない男子学生にとっては、そうしたネガティブな印象を残したままである可能性は十分考えられる。本研究では子育て体験の頻度数のみを聞いており、それらの経験が肯定的なものであったかどうかを聞いていないので、今後はこの点について明らかにすることが課題である。

以上の結果から、男性の子育て意識に影響を与える要

因として、性役割観・幼少期における父親との関わり・子育て体験が挙げられるということが明らかになった。ただし、子育て体験に関してはマイナスに働いており、子育て意識を高めるためには、より肯定的な子どもとのかかわりを経験することが重要となる。その為には、ただ子どもとかかわるのではなく、どのようにかかわると良いかなどを教えてくれる存在が必要であろう。また、ある程度長期的なかかわりを持つことによって肯定的な経験も可能になると思われる。その為には、中学や高校での家庭科の授業において、保育園や幼稚園での長期的な実習やボランティアワークなどが効果的であると考える。また、本研究では平等主義的性役割観は子育ての負担感を低める要因であることが明らかにされた。その為、現代の社会構造を反映したより平等的な性役割に関する教育が必要であると思われる。こうした教育は家庭で行うのは難しいと思われる所以、やはり学校教育のカリキュラムの中に取り入れるべきであると考える。道徳や家庭科の授業を利用して、個人の性役割観を伝統主義的なものから平等主義的なものへと移行させることによって、男性が子育てにかかわることの負担感を減少させ、さらには子育てに積極的な男性の増加へとつながることが期待できる。また、同時に、今後は平等主義的性役割観の個人差を規定する要因を明らかにすることが課題である。その要因が明らかになることによって、より具体的な対策が立てられるであろう。

本研究において平等的性役割感、幼少期の父親とのかかわり、乳幼児とのかかわり経験が子育て意識の内的要因として確認されたが、これら独立変数が従属変数を説明する割合 (R^2) はかなり低かった。つまり、他にも子育て充実感や負担感を説明する変数があることを示唆しており、今後はこれらの変数を明らかにしていくことも重要であると思われる。また、本研究の対象者は 116 名と少なく、大多数が文学部の男子学生であったことも限界のひとつとして挙げられる。今後は、より大規模で代表的なサンプルでの追試が必要であろう。

引用文献

- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎（1999）. 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関連. 発達心理学研究, 10, 189-198.
- 時事通信社（2009）, 「中央調査報 No.622」, 2009 年 7 月 6 日以下のサイトより閲覧
http://www.crs.or.jp/backno/No_622/6222.htm
- 蛭田由美（2000）. 父性意識の発達に関する研究－アンドロジニースケールを用いての検討－. 藍野学年紀要, 14, 34-42.
- 細井勇・古橋啓介・秦和彦・林ムツミ・本多潤子

- (2005). 田川地域における高校生の子育てについての意識調査. 福岡県立大学人間社会学部紀要, 13, 2, 51–74.
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親となる」ことによる人格発達－生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5, 72–83.
- 数田早智子 (1998). 乳幼児をもつ父親の父性意識に関する研究－父と子の絆の形成過程－. 名古屋大学教育学部紀要, 45, 203–204.
- 厚生労働白書 (2007), 2009年7月6日以下のサイトより閲覧
<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/06/dl/1-1.a.pdf>
- 厚生労働省 (2008). 「平成19年度雇用均等基本調査」結果概要, 2009年7月6日に以下のサイトより閲覧
http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/08/h_0808-1.html
- 松井洋 (2003). 親子関係と子どもの道徳性. 川村学園女子大学研究紀要, 14, 85–99.
- 松平久美子・三浦香苗 (2006). 中学生の父親存在感認識と情緒的自律の発達との関連. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 9, 106–118.
- 佐々木保行 (1996). 父親の発達研究と家族システム－生涯発達心理学的アプローチ. 教育心理学年報第35集, 137–146.
- 三好環 (2007). 大学生の父親の思い出と現在の父子関係－“愛された実感”と関わり経験を通して. 幾央大学紀要, 6, 37–45.
- 水落正明 (2006). 家計の時間配分行動と父親の育児参加. 季刊・社会保障研究, 42, 149–160.
- 森下葉子 (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究, 17, 182–192.
- 中嶋律子・北川真理子・小笠原昭彦・神田真愛・植松みほ・安藤えみ・鈴木理美子・中野あゆみ・長谷川綾・近藤晴子 (2001). 高校生・大学生の親になることへの意識調査. 名古屋市立大学看護学部紀要, 1, 93–99.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成. 心理学研究, 65, 34–41.
- 富永ちはる・宮崎正明 (2007). 父親の子育て態度と家族システムに関する研究－FACESⅢでみる現代家族の特徴－. 長崎大学教育学部紀要－教育科学－, 71, 23–38.

